

特集

信州の 新しい 手仕事



国内でもものづくりがさかんな地域のひとつ、信州・長野県。豊富な天然資源を背景に農閑期の副産物などとして古くから手仕事が培われてきました。それらは工芸、民藝、農民美術などさまざまな“かたち”を取りながら次代に受け継がれ、なかにはクラフトフェアのように県外からも多くの来場者を集める巨大なイベントへと発展しているものもあります。

ところが近年、工芸でもクラフトでもいずれでもないような、新しい手仕事が増え始めているように感じます。既存の組織や流通にとらわれないもの、ほぼ独学で習得したもの、アートやデザインの要素を吸収したもの、創作より暮らしや生き方を優先するもの、よりダイレクトに社会へ働きかけるもの……。

本特集では、名もなきその一群から7組の作家をピックアップ。ものがあふれる時代にあって、なぜ人間はつくり続けるのか？ “ものづくり”のイメージを更新する、新しい手仕事を紹介します！

イラスト＝塩川いづみ

Q 農民美術って、何ですか？

A もとは、「農民がつくった美術品」を指す一般名称です

こっば人形、木彫など、「農民美術」と聞いて連想するものは人それぞれかもしれない。「農民（がつくった）美術（品）ですから、もともとは一般名称です。木彫りでなくともよく、誰でもつくれるものでした」とは山極佳子さん（以下、発言はすべて山極さん）。

大正時代^{かなえ}に山本鼎（次項参照）が呼びかけた農民美術運動では、農民による工芸制作が推奨された。農閑期の収入源としてだけでなく、つくることで喜びをもたらすことも目的とし、その両面によって農村の生活が潤うことを目指した。

鼎は長野県出身ではないが、父親の医院が上田市（当時は神川村）にあったことや、資産家で学識者の地元農村青年・金井正の経済的支援により、上田が運動の基盤となった。「そのため、現在では『農民美術』と言えば上田の特産品ということになっています。一般名称だったものが固有名詞化したんです」

1920～30年代には全国で約120の生産団体が設立されるなど大きく展開したが、問題に直面する。「当初は自由参加の農民による副業であることが前提でしたが、産業として継続していくために、質と量を担保する必要が出てきたんです」。やがて金井らによって、市場の需要に応じた制作方針へと大きく舵を切った。

農民美術は戦時期に衰退していくが、1955年には長野県が後継者を養成する制度を実施。1982年には長野県の伝統的工芸品として指定され、現在では長野県農民美術連合会に所属する農民美術作家が担っている。

長野県は手仕事の文化が深い！ その現状をたどる前に、先人の歴史を振り返ろう。まずは上田市から発祥した農民美術。近年、そのかわいらしさから再び脚光を浴びているが、そもそもどんな創作だったのか？ 上田市立美術館学芸員の山極佳子さんに解説いただいた

取材・文＝吉澤朋 写真＝齋梧伸一郎



《楕円形平木鉢（水鳥）》
大正時代～昭和初期
上田市立美術館蔵



長野と
手仕事の
物語

#1 農民美術

のうみんびじゅつ

Introduction

Q 山本鼎ってどういう人？

A 自由な感性を重んじた芸術家です

愛知県、現在の岡崎市出身の芸術家。父親は医者であり、裕福な家庭に育つ。10歳で版画の彫り師の工房に弟子入りした後、現在の東京藝大・西洋画科選科に入学する。留学先のフランスからの帰国途中に、子どもたちが自由にのびのびと描いた絵の展示・児童創造美術展と、ロシアの農民美術を目にし、刺激を受ける。

帰国後、自由に感じ取る児童の感性を尊重する児童自由画運動と農民美術運動を展開。どちらも“本来の美術とは感性を豊かにするもの”という鼎の信念を反映している。「農民美術の練習生となった青年たちが、途中で見本と全然違うものをつくり始めたエピソードが残っています。仕事を楽しむ自発的な姿勢を、鼎はとても喜び、大切にしたいそうです」

鼎自身は、下絵、彫る、刷ると元来は分業制であった木版の全工程を自身でこなす「創作版画」を提唱したほか、水彩、油彩画の制作や、ポスターや雑誌の表紙のデザインも手掛けるなど多才な人物だった。



《こっぱ人形》
大正時代～昭和初期
上田市立美術館蔵

Q 農民美術って、いまはどうなっているの？

A 時代の変遷を経て原点回帰しています

農民美術は時代につれて大きな変遷があった。1970年代にはレジャーブームに乗り、登山やスキー人形、高山植物のレリーフが土産品として定着。その後、上田地域の祭りなどで伝わる“上田獅子”をモチーフにした壁掛けが新築祝いとして流行し、サイズも幅1mを超えるなど巨大化した。少し前まで一般的だった農民美術の重厚なイメージはこの時代の影響だ。

一転して現在では、西洋化した家のつくりや生活様式に合わせ、作品は再び小型化している。鳩の砂糖壺はインテリアとしても人気だ。また上田市立美術館のこっぱ人形づくり体験講座には市内外から多くの参加者があり、現役の農民美術作家のもとには県外からも制作希望者が訪れるそう。

「若い女性の参加者も多く、農民美術が『かわいいもの』と認識されているのが面白いなと思います。農民美術運動の出発点は、つくり手の自発性や感性を大切にすること。だから現在の農民美術は、原点回帰している気がしますね」



解説いただいたのは……

山極佳子さん（上田市立美術館学芸員）

長野県上田市出身。大学在学中に生涯学習施設の機能に興味を持ち、大学院で博物館学を学ぶ。論文テーマは山本鼎の農民美術運動。2018年に上田市に入庁し、上田市立美術館に配属される。2023年『中村直人展 モニュメンタル/オリエンタル』担当



春原敏之《鳩の砂糖壺》、作家蔵

Q 民藝って何ですか？

A 普段使いの器や、地域の文化に目を向けた思想や運動です

民藝という言葉が生まれたのは大正14年（1925年）。それまでは下手物（ゲテモノ）と呼ばれていた日常使いの雑器に美を見出した、哲学者の柳宗悦、陶工の濱田庄司と河井寛次郎の三人で、「貴族的工藝」の対義語として「民衆的工藝」という言葉をつくり、短くしたのが民藝の発端だ。

加えて、「民藝にはレジスタンスの思想が込められていたと思う」と吉川徹さん。また、「戦争へ向かっていく当時、日本各地にある固有の文化を大事にしたいという民藝運動は、国家に権力が集まり市民の自由がなくなっていく流れに抵抗する思想だったのでしょうか」とロジャー・マクドナルドさんは補足する。続けて、「民藝＝おしゃれな生活の道具」という一般的なイメージとは大違いだということですね。社会や政治の問題と工芸を結ぶ考え方は、多津衛民藝館初代館長である教育者・小林多津衛も大切にしてきたもので、当館独特な面もあるかと思います」

Q 民藝は農民美術と何が違うの？

A 民藝には“用と美”という概念があります

同時代を生きた農民美術運動提唱者・山本鼎と民藝運動創始者・柳宗悦は、ともにひと握りの天才ではなく市井の人々がつくりだすものに価値を見出した。親和性の高いように見受けられる二つの運動は、しかし、ひとつの流れになることはなかった。

「農民が農閑期などに創作する農民美術と、“用と美”、つまり、もともと使われていたお茶碗などに美しさを見出した民藝運動とは、違いがあったと思います」と吉川さん。農民美術の主眼が主体的につくり出すことにあるなら、民藝運動はすでに存在して、使われていたものに美を見出した。そこに独自の思想と既成概念の転換がある。

#2

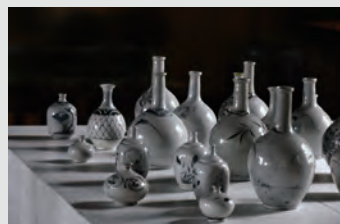
みんげい

民藝

長野と
手仕事の
物語

続いては民藝。長野の民藝と言えば、ものづくりの職人たちが集まった城下町・松本市がよく知られるが、佐久市望月には独特の民藝の流れがいまも残っている。同地の多津衛民芸館を訪れた

取材・文＝吉澤朋 写真＝滝澤さや香（P13下を除く）



Introduction

Q 長野の民藝の特徴は何ですか？

A 松本市は柳の薫陶を受け、望月では社会運動と結ばれました

型絵染作家・三代澤本寿と工芸店主・丸山太郎らが長野県松本市に日本民芸協会長野県支部を設立したのが昭和21年（1946年）。現在でも、長野の民藝というと松本市がまず連想される。「柳宗悦は松本によく通いました。柳の指導があって生まれた松本の民藝は、いまも松本民藝家具や松本民藝館が中心となって続いています」と吉川さん。

一方、多津衛民藝館のある佐久・望月地方には別の文脈で民藝の思想が根付いていた、とロジャーさん。「もともと望月は農民運動や市民運動がさかんな土地で、白樺教員がいたことも大事なポイントです」。例えば、柳宗悦が民藝運動の前に参画していた雑誌『白樺』。武者小路実篤や志賀直哉らが寄稿したこの雑誌の売り上げは、1位が東京、2位が長野だったそうで、小林多津衛（前項参照）を始め多くの若き長野県教員たちが自由主義・人道主義思想に感化され、白樺運動として展開した。

しかし、なぜ長野で民藝がさかんなのか？「ひとつには、信州は貧しかったという側面は大きいです」と吉川さん。隣県の新潟のように米の収穫が見込めない厳しい環境のなかで、それでも理想を求める思想が育まれた。その醸成に白樺派や民藝運動が大きく寄与しているのだという。

Q いま、民藝に学ぶべきことを挙げるなら？

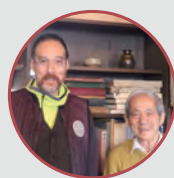
A 資本主義が行き詰まる現代、 民藝には持続可能性が残っています

民藝という言葉が生まれて2025年で100年。当時産業革命により生活様式が大きく変化するなかで、失われつつある日常雑器とそれを生み出す技と心に光を当てた民藝運動には、国内外から再び注目が集まっている。

「利益の追求によって成り立つ資本主義の限界が見えてきました。こういう時代にこそ、暮らしそのものを考え直さなくてはいけない。民藝が見直されている背景にはそれがあると思います」と吉川さん。

西洋美術の研究活動が長いロジャーさんは、民藝から学ぶことは多いという。

「民藝には、いまの言葉で言う“持続可能な”素材との向き合い方があります。産業革命を経て、買えば何でも手に入る時代になりましたが、人類は身の回りにある植物や水、土など限りある資源を使ってものづくりをしてきた時代のほうが圧倒的に長い。手でものづくりをする民藝の世界には、そのつくり方、売り方（経済の循環）、使い方が残っています。いまこそ、そこに目を向けたいですね」



解説いただいたのは……

左：ロジャー・マクドナルドさん（多津衛民芸館館長）
インディペンデント・キュレーター、ハウスミュージアム
「フェンバーガーハウス」館長。2024年より多津衛民芸
館館長。専門は西洋美術史

右：吉川徹さん（同館理事・前館長）
東京都出身。24歳で長野県旧望月町（現佐久市）の役場に
赴任。1999～2003年、望月町長。多津衛民芸館の創設
メンバーのひとり

Q クラフトって何ですか？

A 日本では生活や実用に密接したものづくり全般を指します

クラフトの定義は難しい。意味が欧米諸国と日本国内で異なるうえに、翻訳語としてのねじれなどもあり、美術界を縦横無尽するさまざまな歴史的背景と解釈の玉石混淆になっているからだ。

この混沌から手がかりを求めるならば、まず英国を中心に展開されたアーツ・アンド・クラフツ運動に触れたい。これは産業革命を契機に衰退した手工業の復権を唱え、工業化以前の時代に美と道徳の理想を求めた運動である。端的に言えば、良いクラフト（＝人の手による美的な仕事）に回顧する動きだ。

一方、日本におけるクラフトおよび工藝（＝工業的藝術）とは、機械化とは関係なく、人々の生活および実用と深く関係しながら発展してきたものづくりのこと。屏風、襖などに描かれる日本画までがクラフトに含まれ、機械制作を認めないなどの厳格な規定も特に存在せずに現在に至る（民藝は手仕事のみを指すこともある）。つまり、話者次第でゆらぎのある言葉なのだ。

Q どうして長野では クラフトがさかんなんですか？

A 自由を認める風土があるからでは

1985年、日本初のクラフトフェアとして立ち上がった『クラフトフェアまつもと』は、長野県内外の関連イベントの火付け役である。

毎年のように視察が来るその理由を、「地元産業をプレゼンテーションする意味合いが強い陶器市などとは異なり、クラフトに携わる個人作家の発信の場としての自由さにあるのでは」と伊藤博敏さんは評する。そこには楽市楽座として自由な商売を認めてきた、松本という城下町ならではの特性が働いているのだろう。同様に、インディペンデントな運営体制であれば、発起人が気負わずに始めやすいケースもあるという。

長野県ではほかにも、『善光寺びんずる市』『八ヶ岳クラフト市』『信州ハンドクラフトフェスタ』など2025年も多くのクラフトフェアが開催される予定だ。

最後は長野の手仕事の代名詞、クラフト。全県各地で開催されるクラフトフェアの先駆けにして3万人以上を動員する『クラフトフェアまつもと』に長年携わる伊藤博敏さんに、クラフトの基本を訊いた

文＝小泉悠莉亜 取材＝岡澤浩太郎 写真提供＝伊藤博敏

#3

クラフト

くらふと



長野と
手仕事の
物語

Introduction

Q 最近のクラフトの特徴や傾向は？

A シンプルで多様化、見せ方にも演出が

かつてよく見られた、アフリカの土着的な手製の雑器を芝生の上に雑然と並べる出展者など、ヒッピー世代のつくり手の姿はもはやない。

そうした強い個性のある作家の減少に反比例するように、近年のクラフトフェアでは「暮らしに馴染むシンプルなお作品が増えた」と伊藤さん。見た目はシンプルながらも、ガラスを例に、切り子、ブラスト研磨、フュージングなど素材特性を活かした技法的な作品は多様化している。

また自らの出展ブースを自作し、作品の見せ方まで考慮した空間演出も近年の傾向のひとつ。「まるでギャラリーのような空間も」と言及するように、はめ窓越しに接客可能な欧風式の設えを設計したランプ作家のブースなども過去には登場した。



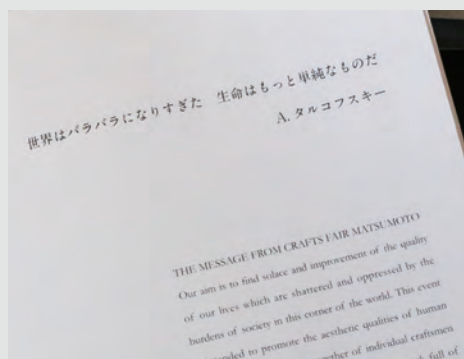
Q クラフトフェアまつもとの課題は？

A 平和な暮らしの大切さを、もっと感じてもらえたら

クラフトフェアまつもとの配布冊子には次の一文が明記されている。「世界はバラバラになりすぎた 生命はもっと単純なものだ (A.タルコフスキー)」

運営側の思いとしては、クラフトフェアはただの祭りごとではない。伊藤さん曰く、「平和な生活、暮らしの大切さを、出展者である作家にも、買い手である来場者にも感じてほしい」という願いとビジョンがあり、その表れとして冒頭の一文が引用されているのだ。

しかし過去最大7万人強(2012年)の来場者を記録した大規模なイベントになった現在、来場者やボランティアスタッフなど、すべての関係者に思想を共有することは難しい。購買行為の裏にあるつくり手の意思を受け取るまでが、クラフトを買う行為や意義であると言えるだろう。



解説いただいたのは……

伊藤博敏さん (NPO法人松本クラフト推進協会代表理事)

石のアート作品を手掛けるアーティスト。大学卒業後、地元・松本市で五代続く伊藤石材店を継ぐかたわら、隣接するギャラリー自遊石も運営。2024年で開催40回を数えた『クラフトフェアまつもと』には初回から参加している